

幼小接続期におけるカリキュラムの開発

善野 八千子

奈良文化女子短期大学

An Attempt of the Curriculum Model Development for Connecting Kindergartens to Elementary Schools

Yachiko Zenno

Narabunka Women's college

幼稚園と小学校との連携は、長年にわたってすでに多くの研究や実践が行われてきているにもかかわらず、多様で複合的な要因によって充分取り組まれていない。本研究は、幼稚園と小学校両者による教育課程の理解を中心にして推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的として、両者の教職員の連携活動を推進する組織開発のあり方を探った。そして、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラムの作成」を通して、構成要素と作成の手だてについて明らかにしつつ、教育課程の理解を入り口として、教職員の理解と子ども理解を同時にすすめながら、幼小連携を推進しようとするものである。

キーワード：幼小連携 (Cooperation between Kindergartens and Elementary Schools) 教育課程 (Curriculum) カリキュラム開発 (Curriculum Development) 交流活動 (Interchange Activity) 異学年交流 (Different Grade Interchange)

1. 問題と目的

発達段階に応じた学校段階間の円滑な接続が問題となっている。保幼小連携をめぐっては、すでに多くの研究や実践が行われてきているにもかかわらず、保幼小連携が進みにくいのはなぜであろうか。

都道府県、市町村のほぼ全ての自治体が、幼稚園教育と小学校教育の接続は、幼稚園が義務教育及びその後の教育の基礎を培う上で重要であると認識しているが、ほとんどの都道府県、市町村で幼稚園教育と小学校教育の接続のための取り組みが行われていない。その理由として、①幼稚園と小学校の教育課程の接続関係が分からない。②幼稚園教育と小学校教育の違いが十分理解されてない。③教育課程の接続に積極的になれないことがあげられる。しかし、ほぼ全ての自治体が、幼稚園教育と小学校教育の接続のため、双方にまたがる「接続期」を設け、幼小が協力して教育課程を編成する必要があると考えている。また、幼稚園と小学校の教育課程の接続を推進していくために、大切だと思うことはなにかに

ついて、ほぼ全ての自治体が、「接続期」の教育課程は幼稚園と小学校が歩み寄って編成すべきであり、一方が他方に合わせるべきではないと考えている¹⁾。

連携の取り組みのプロセスとして、「まず、幼児・児童の交流からはじまり、次に教員同士の研修やチーム・ティーチング、人事交流が行われ、最後に教育課程が編成されるという流れになっている」と指摘されている²⁾。また、「『交流』活動は、従来より比較的さかんに行われてきたが、『教育課程をつなぐ』という意味での『接続』は理念的なものにとどまっており、具体的方策の提示は数少ない」ともいわれている³⁾。

現状として、長年にわたってその重要性が指摘されつつも、多様な個別的要因によって充分には取り組まれていない幼稚園と小学校との連携の課題がある。

こうした中であって、先進的な研究としては次のものが知られている。幼小連携教育に関する論文集『幼児教育と小学校教育をつなぐー幼小連携の現状と課題ー』（お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター）⁴⁾。「幼小教育課程の編成のありかたー幼小一貫カリキュラム編成に関わる学びと学習ー」⁵⁾。

また、幼稚園と小学校の教育課程をつなぐ試みとしては、東京都中央区立有馬幼稚園・小学校⁶⁾、滋賀大学教育学部附属幼稚園・小学校⁷⁾、鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園・小学校⁸⁾、お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校⁹⁾、広島大学学部・附属学校¹⁰⁾などが実践的な研究としてあげることができる。

最近では、「今すぐできる幼・保・小連携ハンドブック「小1ギャップ」の克服を地域で支える-」（2010日本標準）では「小1ギャップ克服」という点からQ & A形式も含めて現場への具体的なアドバイスという教員研修に寄与する研究もみられる¹¹⁾。

次に、国内外の動向を見てみると、国際的動向としては、経済協力開発機構（以下、OECDと略記）「世界の教育改革」2000¹²⁾において、「幼年期に質の高い教育を用意することが生涯学習の基盤を形成することである。質の高い就学前教育及び保育環境で育った子どもはすぐれた思考力や問題解決能力を発達させる。」とされた。続いて、OECD（2003）¹³⁾で示されたキー・コンピテンシーとして、「1 社会的に異質な集団で交流すること」、「2 自律的に活動すること」、「3 道具を状況に応じて用いること」の3つカテゴリーが示された。質の高い就学前教育及び保育環境が問い直されている。

国内の動向としては、中央教育審議会答申（平成20年1月17日）¹⁴⁾「6. 教育課程の基本的な枠組み」において、幼児教育と小学校低学年の接続に関しては次のように示された。

幼児教育では、「小学校低学年の各教科等の学習や生活の基盤となるような体験の充実が必要である。」とされた。また、小学校低学年では、「幼児教育の成果を踏まえ、体験を重視しつつ、小学校生活への適応、基本的な生活習慣等の確立、教科等の学習への円滑な移行などが重要であり、（中略）各教科等の内容や指導における配慮のみならず、生活面での指導や家庭との十分な連携・協力が必要である。」「教育課程の改善に当たっては、発達の段階に応じた教育課程上の工夫の観点から、学校段階間の円滑な接続に留意する必要がある。」と示された。

幼稚園教育要領¹⁵⁾における「接続」の記述は以下のようである。第3章指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項 第1 指導計画の作成に当たっての留意事項 1 一般的な留意事項 (9)幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成に

つながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。2 特に留意する事項 (5)幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること。

さらに、小学校学習指導要領生活編「生活科の指導計画作成と内容の取扱い」¹⁶⁾の中では、「特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。」が付加されている。この文言を基に『解説』「第4章指導計画作成上の配慮事項」の(3)に、「スタートカリキュラムの編成」が新入児童の小学校生活への適応を促し、小1プロブレムなどの問題解決に効果的であるという見解が示された。

筆者はこれまで、生活科移行期(1988年)から着手した生活科教育実践研究を継続し、「子どもと保護者と教師が育つ生活科の実践的研究」¹⁷⁾にまとめた。その上にたつて、幼児教育と小学校以降の教育の接続について、近年の子どもの育ちや社会の変化に対応した子どもの発達・学び・生活の連続性と育ちの結果を保証する研究を進め、「保幼小連携の課題解決に向けた考察」¹⁸⁾を論じてきた。

これまでの研究の現状から見ると、以下のことが言えると考えている。

- 幼児教育の側からの「幼小連携に関する具体的な指導改善の実践的研究」のニーズが高い。
- 実践発表の交流では、一部の幼小連携事業指定校園のみの実践に終わっている。
- ポスターセッション型の実践交流を推進したことで取り組みは広がりつつある。
- 幼小連携のあり方は校区の特性によって異なることから、教員に汎用性のあるカリキュラムの作成の体験が必要である。
- 研究論文等には連携の重要性についての論述や交流活動事例は多く見られるが、新学習指導要領の求める内容に沿って接続カリキュラムを構築するための手だて及び作成過程等について整理された研究は、まだ散見されないようである。

これまでの幼小連携における教育課程の接続を目指した先進的な研究をふまえ、本研究は、子どもの育ちと学びの連続を保証することを目的として、幼児教育と小学校教育にかかわる両者の教職員の連携活動を推進する組織開発のあり方を探っていきたい。そして、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラムの作成」を通して、構成要素と作成の手だてについて明らかにしつつ、教育課程理解を入り口として、教職員の理解と子ども理解を同時にすすめながら、幼小連携を推進しようとするものである。

2. 方法

2.1 問題点

2.1.1 接続カリキュラムの作成

学習指導要領の内容レベルの位置づけにかかる文部科学省の見解として、「学習指導要領は学校で扱う学習内容のミニマム」とされている。しかし、学習指導要領の寿命は長くても10年で改訂となる現実がある。政治的圧力、経済界からの要請、時代や社会の変化への対応、子どもや教師や家庭・地域の実

態の変化に伴って、旧要領が否定されることもある。学習指導要領を柔軟に解釈して、教師・各学校が独自のカリキュラムを創造していく時代である。

第1章でも述べたように、幼小連携のカリキュラム作りに関する取り組みは、各自治体の教育施策に位置づけられ、各学校園は学校種ごとにこれまで様々な試みと多大な努力によって連携カリキュラムを作成している。しかし、それは殆ど学校種ごとに作成された後に継ぎ合わされたものであったり、校区ごとに合同研修という時間を捻出して作成されたりしたものである場合が多いと思われる。

また、完成して報告書や実践事例集として配布されても、当事者がその担当学年でなくなったり異動したりして、活用されなくなり、カリキュラム評価も改善もされないまま保管されている場合すらあるのが現状である。

そこで、地域の特色や学校園の幼児・児童の実態を反映したカリキュラム作成の前に、かけがえのない子どもに基礎的・基本的な内容の徹底、基本的生活習慣の確立及び徳性の涵養を重視する教育の推進を目的としたカリキュラムの作成をめざすこととした。換言すれば、どの地域にあってもベースとなる子どもの発達を踏まえた「汎用性のある幼小接続カリキュラム」の作成である。

本来、カリキュラムとは、子どもの育ちの連続性を見通しつつ、眼前の子どもの実態に即した流動的で発展的なものでなければならない。

2.1.2 研究方法

幼稚園・保育所等と小学校との連携の例¹⁹⁾では、①県・市教育委員会が中心となり、小学校教員の幼稚園等への長期（1年）派遣、合同研修等を実施 ②小学校と近隣の幼稚園・保育所が協力し、教職員の相互交流や指導の在り方の協議を実施 ③幼稚園・小学校教員、保育士が合同で、教育実践をもとに「幼児教育研究事例集」を作成 ④共通で作成した年間計画のもと、保幼小の子どもたちが定期的に相互に交流、という4例が示されている。

このように全国的に見られる幼小連携のカリキュラム作成を目的とする組織は、教育センターや教育委員会が研究協力校や研究協力員として委嘱あるいは推薦された各学校園の代表的な構成員によって、幼小連携カリキュラムの作成作業をすすめられていることが多い。

本研究においては、筆者からの提案した目的を共有して、主体的に参加した構成員が、各学校園で実践及び理論構築しながら、作成していくことを提案した。

その対象者は、公立及び私立の保育園・幼稚園・小学校、教育委員会指導主事、大学教員等である。

それは、接続カリキュラムの作成そのものが目的であると同時に、作成作業の過程を通して、学校種の強すぎる帰属意識から脱却し、教育課程の理解・子どもの発達理解を促進していこうとする試みでもある。

2.2 本研究の方法

本研究の方法については、次の手順で進めていくこととした。

- (1) カリキュラム作成に関わった幼稚園・小学校教員及び当該園の保護者を対象としてアンケート調査及び結果を考察する。
- (2) 幼小連携のカリキュラム作成に関する基本的な考えを検討しつつ、発達に即した「育てたい姿」と

「内容」を設定する。

- (3) A市立小学校及びB市立幼稚園の2009年度の実践を基に、幼稚園年長5歳児2月末から、小学校1年生入学後4月・5月第1週までの「接続期7週間モデル案（第1次）」を作成する。
- (4) 接続カリキュラム作成の課題や手だて及び具体的方法について、明らかにする。

3. 研究の実際

3.1 研究組織開発の方策

幼小連携のカリキュラム作成に関する基本的な考えを検討するにあたっては、初めに、発達に即した「育てたい姿」と「内容」の設定を目的としてきた。しかし、参加者に当事者意識が生まれにくく、交流活動の情報交換に終始しているという実感を否めなかった。そこで、幼小の子どもたちの育ちの連続を担う研究組織の編成から着手した。

2009年3月から毎月第3土曜に「保幼小連携WG合同研究会」を本学において開催した。以下の目的を明確に提示し、県内を中心に関西一円の保育所・幼稚園・小学校及び教育委員会等に随時参加を呼びかけた。

参加希望者であれば、地域を問わず随時参集可能な研究会とした。現時点での参加者はのべ360名と

「奈良文化女子短期大学 保幼小連携WG合同研究会」

発足にあたって

代表 善野八千子

【目的】

(1)基本方針

- 近年の子どもたちの育ちの変化や社会の変化に対応した、子どもたちの発達・学び・生活の連続性と育ちの結果を保証する研究をすすめる。
- 保幼小教職員、大学教職員及び学生等にとって互恵性、継続性・発展性のある学び続ける場を創っていく。

(2)具体的事項

- 子どもたちの連携
理念の共有と理論構築をする。
- 教育課程上の教職員の連携
「接続カリキュラムの作成」としてまとめる。
合同授業研究等を実施し、教職員の資質向上を図る。
(以下省略)

なり、その構成員は、奈良県・大阪府・兵庫県・岐阜県・徳島県の私立・公立幼稚園及び認定子ども園、小学校教員・管理職並びに教育機関指導主事、大学教員である。(2009年3月～2010年9月現在)

合同研究会参加者である教員の意識の変容について、リフレクション自由記述による聴き取りを筆者が実施し、付表1にまとめた(2010.3.10～3.20回収)。

3.1.1 2009年度 合同研究会に参加者によるリフレクション

2009年度合同研究会に参加者によるリフレクションをまとめてみると、次のことが言える。

これまで、幼小の関係者で議論を深めていく場や時間が設定しにくい状況にあり、双方に理解し難いことが多々あった。しかし、合同研究会での協議を通して、幼児期と小学校の教育を円滑につなぐことの重要性を認識が深まっている記述が多く見られる。このように直接の連携学校園でなくても相互理解を深めるのに有効であることが分かる。想定外であったが、合同研究会の設定時間終了後の自然発生的

な情報交換も、本来の目的の「教職員の連携」推進に寄与したと考えられる。例えば、同校区で幼小連携にかかる打合せが初めて実施されたり、同市内の参加者グループが次回の本研究会開催までに事前検討会を自主的に企画・実施したり、他市との情報共有において新たな方策が生まれ、また全国的には少数の男性保育士同士のつながりができたりする等の事例も見られた。

また、接続期という期間を就学前後の7週間に設定することで、入学当初の児童の実態が想定しやすかったことも「接続カリキュラム作成」の作業が進んだことの要因の一つであると思われる。

さらに、小学校教員に対する幼小連携の意識調査や就学前の保護者意識調査も主体的に進められた。このことは、カリキュラム作成における改善の視点にも生かされることとなった。

3.2 接続カリキュラム作成の手立てと方策

3.2.1 A市立小学校2009年度の実践を基にした「接続期7週間モデル案（第1次）」の作成

A市立小学校2009年度の実践を基に、「接続期7週間モデル案（第1次）」を作成することとした理由は2点あげられる。

1点目には、これまでA市が幼小連携の推進にあたり、すでに取り組みが進みつつあることである。

平成14年度から始めた教育改革推進フォーラムは教職員のみならず、保護者、学校評議員、市民の参加による、推進モデル校園等の取組を論議するとともに、その成果を広く周知するものである。第7回教育改革推進フォーラム（平成20年8月

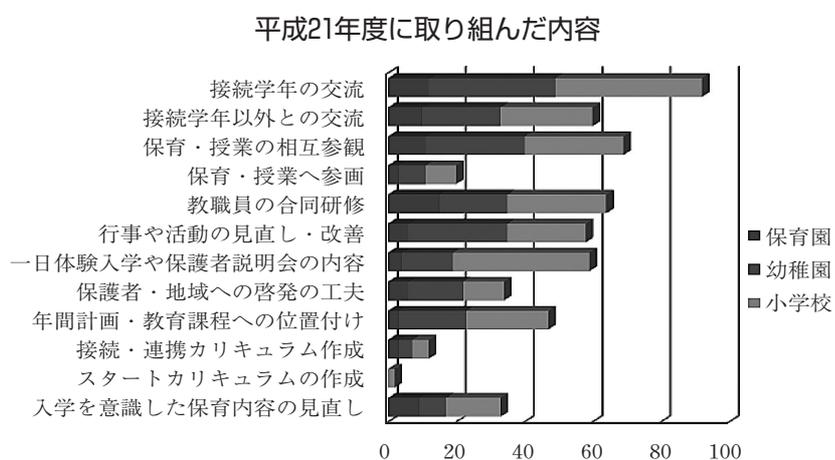


図1 「幼小連携で取り組んだ内容」(2009年度A市調査)

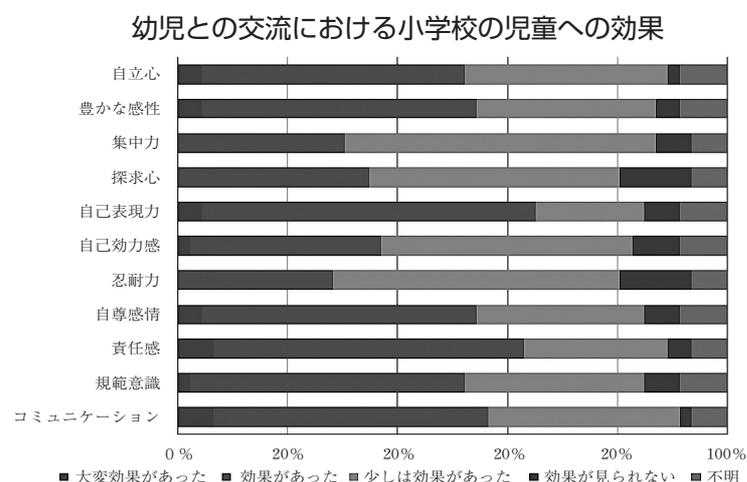


図2 「幼児との交流における小学校児童への効果」(2009年度A市調査)

29日)においては、幼小連携部会で、筆者は指導助言としてかわり発表者は公立小学校第1学年担任教諭(本研究の2009年度・2010年度実践者)であった。

その後A市は、各学校・園、保護者・保育士・教職員にアンケートを実施し「幼小連携で取り組んだ内容」(図1)についてまとめ、効果についても調査

している(図2)。A市にお

る幼小連携はかなり進んできていると思われる。しかし、連携内容を見ると、カリキュラムへの位置付けまでは進んでいるとはいえない。

2点目には、先述の7回教育改革推進フォーラム（平成20年8月29日）において、幼小連携部会における実践発表者である公立小学校第1学年担任C教諭は、同校において5年間にわたって第1学年担任として生活科を基軸とした幼小連携の取り組みを進めてきていることである。C教諭の学年が実践した4月から5月までの、詳細の活動事例や改善点の上に立って検討をすることが、先行実践研究を生かした接続カリキュラムの検討案として適切であると選択したものである。

3.2.2 B市立幼稚園2009年度の実践を基にした「接続期7週間モデル案（第1次）」の作成

B市立幼稚園2009年度の実践を基に、接続期7週間モデル案（第1次）」を作成することとした。その理由は2点あげられる。

1点目には、これまで文部科学省委嘱の研究開発に取り組んできた経緯がある。その課題は、幼稚園・小学校接続期における系統性を重視した教育課程の編成と指導方法・指導体制の工夫・改善及び幼稚園からの楽しい英語学習についての研究開発である。研究の概要は、以下の通りである。幼稚園から小学校への円滑な接続を図るため、幼稚園小学校9年間で2年間の「プライマリーコース」（3歳児・4歳児）、3年間の「ジュニアコース」（5歳児・小学校1年生・小学校2年生）、4年間の「シニアコース」（小学校3年生～小学校6年生）に分け、幼稚園小学校の接続期である「ジュニアコース」を中心に新たな教育課程の編成について研究した。具体的には、5歳児に、合同授業の前後に行う「T-プレイ」を設置し、小学校低学年に従来の教科の枠組みを外した「新教科」（「ことば」、「かず」、「はっけん」、「ひょうげん」、「うんどう」）を設けるとともに、5歳児で学んだ内容との円滑な接続を図ってきた。また、5歳児と小学校第1学年で週3時間程度、合同授業を実施した。しかし、このような先進的な取り組みの研究開発の成果があるものの、2年後の当該幼稚園には、5歳児が在籍しない実態もあり、「認定こども園」となったことから、前掲のカリキュラムもどのように生かされていくのかカリキュラムの改善が求められている。

2点目には、平成20年度は、B市立幼稚園11園全てが、文部科学省委嘱「幼稚園における学校評価の推進に関する調査研究協力者」となったことである。設置者の施策の検証として、学校評価を通して幼小中連携を一層推進したいという願いがあった。また、学校評価を活用して、幼小連携の実践を保護者や地域に問いかけ参画を促すための一つのコミュニケーションツールとしたいとのビジョンをもって取り組んでいる。

幼小連携事業委嘱校であるB市幼稚園が連携先の小学校教員を対象にアンケートを実施した。次に示すのは、「小学校教員が最近の1年生の変化に対して特に感じていること」並びに「小学校でスムーズなスタートができるために幼稚園で身につけてほしいこと」の聞き取り調査（2009年6月実施）の自由記述112項目を分類したものである。

○小学校教員が実感する子どもの変化

〈聞く力の低下〉〈耐性の脆弱さ〉

○小学校でスムーズなスタートができるために幼稚園で身につけてほしいこと

〈聞く力〉〈話す力〉〈基本的生活習慣〉〈集団行動の基礎〉〈家庭の教育力〉

これらの抽出された項目については、接続カリキュラム作成の重要な視点として活用した。

続いて「小学校教員の幼稚園への関心」が図3である。B市は、11園のうち、10園が幼稚園と小学校が

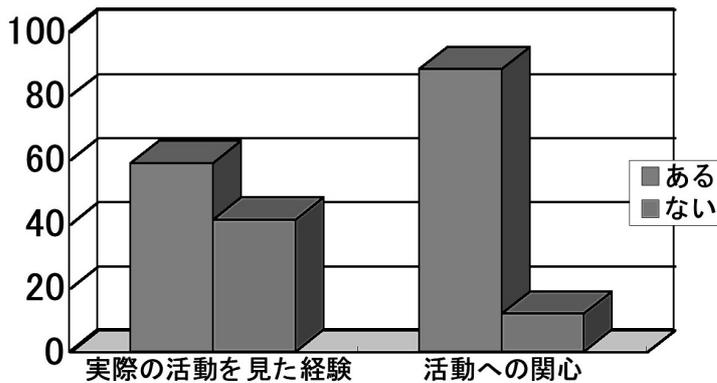


図3 小学校教員の幼稚園への関心
(対象：Y市立小学校教員 実施：2009年度調査)
B市立幼稚園 2009年6月実施

隣接している（1園は道路を隔て設置）。隣接学校はフェンス1枚を隔てている。

中には登校登園の門さえ共通しているという立地条件にある。活動への関心は約90%と高いものの、実際の活動を見た経験のない教員は40%である。立地条件や時間の制約という物理的要因が関心の希薄さにつながるのではないと考えられる。（上記の調査は、合同研究会参加者が自主的に調査したものを筆者が考察した。）

4. 研究の成果

4.1 研究組織の開発

合同研究会参加者（幼稚園・小学校・指導主事等）のリフレクションを概観すると、今回の幼小連携に関する研究組織の編成は、前掲で文科省が「滑らかな接続が実現していない要因」として指摘されている以下の実態を解決するための一つの試みとなったと言えるのではないだろうか。

「滑らかな接続が実現していない要因」

- 教師自身の所属する学校種への帰属意識が強すぎる。
- 他の学校種との交流が少なかったり、十分な情報交換が行われなかったりという状況が見られる。

また、この組織の実施形態は図4のように示すことができる。

ただし、この組織で検討・協議された内容は、各学校園で全教職員に発信し効率的な時間の運用と冗長な情報共有を図っていくことも求められる。その際、全教職員が、幼児教育か

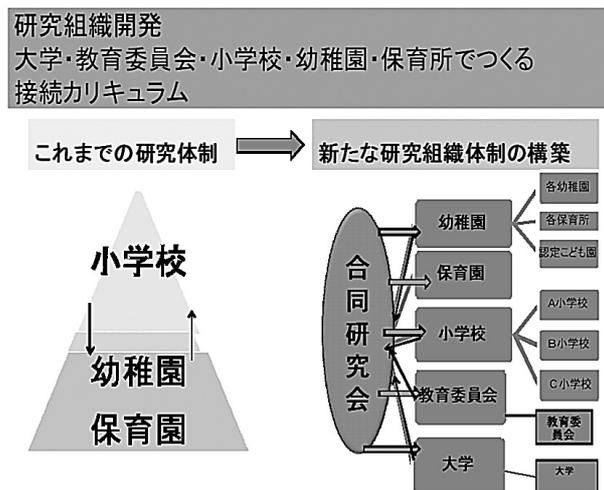


図4 幼小接続カリキュラム作成の組織開発

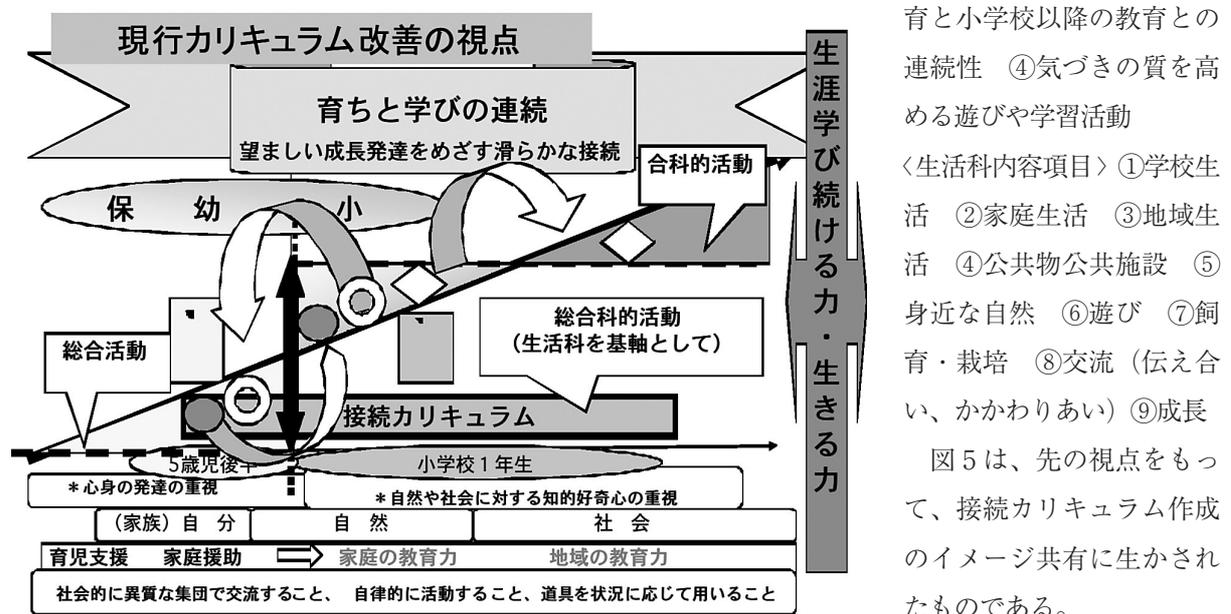
ら小学校教育への子どもの育ちをつなぐことの重要性を理解する風土をつくっていくことが、重要である。

4.2 現行カリキュラム改善の視点と接続カリキュラム試案の作成

次に、現行カリキュラム改善の視点を体験の質と活動の精選に整理し、接続カリキュラム作成に示した。

- (1) 体験の質：①豊かな体験活動 ②遊びから学びへの連続性 ③幼児教育から小学校以降のカリキュラムへの発展性
- (2) 活動の精選：①根拠や成果のないまま慣習になっている活動はないか ②活動のめあては明確か
- (3) 子どもの育ちの連続性

〈生活科改訂の趣旨をふまえた視点〉 ①言語を中心とした表現活動 ②他者との交流活動 ③幼児教育と小学校以降の教育との連続性 ④気づきの質を高める遊びや学習活動



育と小学校以降の教育との連続性 ④気づきの質を高める遊びや学習活動

〈生活科内容項目〉 ①学校生活 ②家庭生活 ③地域生活 ④公共物公共施設 ⑤身近な自然 ⑥遊び ⑦飼育・栽培 ⑧交流（伝え合い、かかわりあい）⑨成長

図5は、先の視点をもって、接続カリキュラム作成のイメージ共有に生かされたものである。

図5 「育ちと学びの連続－望ましい成長発達をめざす滑らかな接続」善野2008¹⁸⁾をもとに作成

4.3 発達に即した「育てたい姿」と「内容」の設定

就学前3週間5歳児の具体的な「育てたい姿」と「内容」について検討した。これまで身につけた力やこの時期の自然との関わり等の検討により、ねらいABCの3点を枠組みとして、育てたい姿及び内容の設定を以下のようにした。

育てたい姿及び内容の設定（就学前3週間5歳児）

【ねらいA】 ⑧交流（伝え合い、かかわりあい）⑨成長

自分の成長を振り返ると共に、小学校入学に期待をもち、自信や喜びをもって生活しようとする。

A-1 小学校の生活に興味をもち、入学を楽しみに待つ → オレンジ色

A-2 園生活を振り返り、大きくなったことを実感し、残りわずかな園生活を友だちと共に自信と喜びをもって送る → 薄緑色

【ねらいB】⑤身近な自然 ⑥遊び

春の訪れに気づき、自然の変化に興味や関心をもつ → 桃色

B-1 身近な自然の変化にふれ、春の訪れに気づき、新しい生命の芽生えを喜ぶ

【ねらいC】⑥遊び⑧交流（伝え合い、かかわりあい）

学級全体活動やまわりの友達と協力して遊ぶ楽しさを味わう → 白色

C-1 友達と共にいろいろな遊びに意欲的に取り組み、自分の力を十分に発揮する。

C-2 クラスやグループで相談しながら、ルールや役割を決めて、協力して遊ぶ。

4.2項の(1)～(3)に基づいて作成された2月～3月末作成接続カリキュラム（就学前3週間）を付表3に示した。

さらに、就学前接続カリキュラムの核となる活動として、子どもが小学校への入学を強く意識し始める2月に設定した。『体験入学』から学校ごっこへ」として（付表2）示した。

続いて、小学校入学後の4月第1週～4週末作成接続カリキュラム（就学後）を提示する。作成に当たっては、2009年度までの実践に以下の5点の改訂の視点を加えて改善した。

《小学校現行カリキュラム改訂の視点》（入学後4週間6歳児）

- ①適応指導は、基本的な生活習慣の確認と確立につながっているか
- ②子どもの学びの意欲は喚起されているか
- ③教科指導へと分化していく途上において、指導内容の相互の関連は合科的な指導が有効か
- ④柔軟な時間運用はできているか（短縮15分モジュール、基本45分、延長60分・90分等）
- ⑤聞く力や集団行動の育成に重点がおかれているか

表1 入学当初の4週間の目標及び主な行事

	〈第1週目〉 (4/9～13)	〈第2週目〉 (4/16～20)	〈第3週目〉 (4/23～27)	〈第4週目〉 (5/7～11) *連休明け
	45分×10時間	45分×15時間	45分×20時間	45分×20時間
週 の 目 標	◆安心して遊びや生活ができ、施設の様子が分かる ●先生や友達を知る ●自分で教室に行き、片付けをして席に着く ●トイレや手洗い場が使える	◆学校生活のリズムを知り、 ●先生や友達と挨拶を交わすことができる ●自分で学習の準備をする ●グループで校内で探検をする	◆学校の環境に関心を持ち、 ●自分の役割を知って果たそうとする（水やり・当番） ●集団生活や学習のルールを知る	◆学習や生活に進んで取り組み、自分の思いや考えを集団の中で表現しようとする
行 事	身体測定	日直の仕事、参観・懇談	給食開始	係り活動

まず、子どもが安心して新たな環境の中でこれまでに身につけた力を発揮できることをめざした。そ

の上で、入学当初に身につけさせたい目標を週ごとに設定し、「育てたい姿」として具体化する。また、4月当初に位置づけるのが望ましいまたは必要とされる行事等も記載した。次に、整理したことを日程表（時間割）に位置づけた。特に、「時間・空間・仲間」について弾力的から固定的に移行していくことについても検討した。その上で、発達をふまえた子どもの実態や思いや願いに沿って活動を明記した（表2）。

表2 入学当初第1週目標にそった 第1日目 始業から第1校時の内容と活動計画（抜粋）

第1週	はじめまして友だち・教室 4/9月	第1週 4/9月	はじめまして友だち・教室
1校時	<ul style="list-style-type: none"> ●楽しく歌おう ●あいさつや返事をしよう ●自分のくつばこ、ロッカーの使い方を知ろう 	週目標	<ul style="list-style-type: none"> ◆安心して遊びや生活ができ、施設の様子が分かる ●学校の先生やクラスの友達を知る ●自分で教室に行き、片付けをして席に着く ●トイレや手洗い場が使える
2校時	トイレや手洗い場をつかおう	育てたい姿	<ul style="list-style-type: none"> ●これまで身につけた基本的な生活習慣を生かして、新しい環境の中で、学習の準備や片付けをする。 ●困ったことや分からないことを人とかかわりながら解決しようとする。
3校時	みんなと帰ろう（下校指導）	時間	登校後から1校時（45分） 柔軟な時間運用
教科	生活1、道徳・学活1	空間	<ul style="list-style-type: none"> ●靴ばこ ●自分の教室 ●教室周辺・廊下 ●自分の席
時数	音楽1/3、	仲間	<ul style="list-style-type: none"> ●先生（担任） ●席が近くの友達 ●友達 ●初めて話す友達
		教材	<ul style="list-style-type: none"> ●教室 ●自分の座席 ●ロッカー ●上靴 ●ランドセル
		子どもの活動	<ol style="list-style-type: none"> 1. 上靴にはきかえ、自分の教室に入る。 2. 先生や友達に挨拶をする。 3. ランドセルをロッカーに片付ける。 4. 自分の席に着く。 5. 先生の話の聞いたり、歌を歌ったりする。 6. 名前を呼ばれたら返事をする。 7. ランドセルや靴の片付け方を考えたり確かめたりする。

↑ 上記は、入学当初1日目のみを抜粋例示（保護者及び子どもの出身園へ配付用の一部）

⇒ 右表及びその続きの下表は、活動計画作成に当たり、構成要素と作成の手だて等を検討して記載したもの。

当然、地域性や児童の実態、1 幼1 小であるか、多くの幼児教育施設から入学する小学校かによって異なることは周知の上で、汎用性のあるカリキュラム作成とした。

幼児期から小学校にかけて育てたい力は「自立」と「協同」である。個々の幼児の経験から発展していく小学校教育を連続させていく必要がある。5 歳児に見られる自立と協同の姿を小学校第1学年の学習にどうつなげていくのか共通理解を図ることが接続の上では重要である。

接続カリキュラムは、幼小の違いがあるから作成するのではない。もちろん、小1 プロブレムの解消が目的でもない。この時期の取組をより強化させることで、その後の教科学習に対して意欲的になり、充実した学校生活や学びの契機になることを想定している。

本研究は、継続研究の1 年目である。現在、モデル案をもとに各学校園で実践研究中である。今回は、作成した「幼小接続7 週間モデル案（第1 次）」を提示し、幼稚園と小学校で共に作成していくプロセスと構成要素及び具体方策等について示した。各学校園において、次年度の教育プランの展開となることが期待される。

4.4 研究のまとめ

本研究は、子どもの育ちと学びの連続を保証することを目的として、幼児教育と小学校教育にかかわる両者の教職員の連携活動を推進する組織開発のあり方を探った。そのために、幼稚園と小学校、両者の教職員と教育行政に関わる立場の指導主事及び理論構築していく大学教員による「合同研究会」という組織を編成して取り組んできた。そして、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラムの作成」を通して、構成要素と作成の手だてについて明らかにしつつ、双方の教育課程理解を入り口として、教職員の理解と子ども理解を同時にすすめながら、実践と往還した教育課程の作成ができたといえる。

そもそも幼小連携の目的は、「遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から教科学習が中心の小学校以降の教育活動への円滑な移行」である。幼小のカリキュラムが互いに歩みより、カリキュラムの接続面をより広くしながら新たなカリキュラム開発が求められる。つまり、「つながる」部分が大きくなればな

表2 続き

指導内容	<p><生活></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 楽しく安心して遊びや生活や生活ができる ● 教室・先生・友達のことが分かる <p><道徳></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 気持ちのよいあいさつ ● 物を大切にし、身の回りを整える ● 友達と仲良くし、助けあう <p><特活></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 基本的な生活習慣・望ましい人間関係の形成 <p><音楽></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 楽しく歌い、生活を明るく潤いのあるものにする。
教師の働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ● あいさつ及び・一人ひとりへの呼名や言葉かけ ● 歌遊び等を通して、明るく和やかな一日を始める ● ランドセルに対する入学前の子どもの思いに触れる。 ● 子どもができることを引き出しながら、身の回りの整え方を分かりやすく伝え、明日からの登校後の見通しをもたせる。

るほど、従来あった段差はより低いものとなっていき、「滑らかな接続」が実現されていくと考える。

小学校の単元構成では、「合科的・関連的な指導」がすべての各教科等について認められている。特に、低学年では積極的に推奨されている。すでに法令上は単独教科の枠内に学習活動を閉ざすようにはなっていない。入学当初は特に従来の「教材単元」から「経験単元」への発想が必要であろう。

今回の研究においては、幼稚園と小学校の連携に焦点を当てたものとなった。本来は幼稚園のみならず保育所も視野に入れた小学校との接続について論じていくことが必要である。しかし、現実には保育所職員は勤務時間等の諸条件から、土曜設定の合同研究会に直接の参加は実現できなかった。情報は電子メールで共有したり、直接届けたりしながら進めてきたが、組織の中に保育所の構成メンバーが常時設定しがたい状況であったことに課題が残されていることは否めない。

教育政策の動向に照らしてみると、「認定こども園法案」（正式名称「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律案」）が成立した（2006年10月施行）。認定こども園は保護者の就労の有無にかかわらず、就学前の児童すべてを対象とする。3～5歳児は教育と保育が半々で、午前中は本来の幼稚園的な教育を実施する。このような方向性からみても、幼稚園と小学校の接続カリキュラムの開発は、今後も一層充実改善されていく意義があると考えられる。

5. 課題と展望

OECDバーバラ・イッシンガー教育局長らの研究チームによる「幼保一元化」の必要性の強い訴えもあり、国内においては、いよいよ「幼保一元化」の実現に向け、来年度の通常国会に関連法案を提出する方針も規制改革案に明記された。今後の施策の方向性によっては、保育の質は一気に低下につながり、子どものための福祉的機能・就学前教育がないがしろにされてしまわないかと危惧されることもある。

今後の課題としては、人間の基礎教育の形成となる乳幼児期の保育・教育への投資が特に重要である。このとらえ方について、合田（2009）¹⁹⁾は、「教育を人生前半の社会保障」に位置づけるアイデアは、教育再生懇談会の第四次報告（2009年5月28日）で明記され、安心社会実現会議（同年6月15日）、骨太方針2009（同月23日閣議決定）にも影響を与えたとしている。

先のOECD教育局長らによると、制度が日本に似ているベルギーでは幼稚園と小学校の教諭資格の統合も進んでいるという。本研究は、今後もますます必要性和切実性にせまられていくことになる。

本研究会の参画者である前田（鳴門教育大学）は、「本研究会が幼小連携に取り組んでいるのは、公立・私立、幼稚園・保育所、小学校が小1プロブレムの解決に代表されるような課題解決のための連携ではなく、先の当事者が共通して5、6歳児の子どもたちにどのような能力を育むべきかを関係者全体で議論し、それぞれが自分の役割や機能を果たしながら、誣いては、これをスタートして0歳から12歳までの地域の子どもたちを幸せにする方法を模索していく活動である。」と述べている。本稿ではこの言葉をまとめとし、継続して幼小接続カリキュラム（2次案）の改善と具体化を試みていきたい。

謝辞

本稿は、平成21年度・22年度奈良文化女子短期大学保幼小連携WG合同研究会の成果の一部をまとめたものです。研究にあたり鳴門教育大学前田洋一准教授には有益なご助言、ご指導をいただきました。また、奈良県立教育研究所及び奈良市教育委員会並びに大和郡山市教育委員会の皆様には多大なご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2010) 平成21年12月調べ。幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議第1回配布資料。
- 2) 文部科学省 (2004) 幼児教育と小学校教育との連携・接続について。中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育部会 (第14回: 2004年5月31日) 議事録・配布資料。
- 3) 横井紘子 (2007) 幼小連携における『接続期』の創造と展開。お茶の水女子大学子ども発達教育センター紀要第4、46頁。
- 4) 無藤隆・神長美津子・酒井朗・藤江康彦・清水由紀・内田伸子編 (2005) 幼小連携教育に関する論文集『幼児教育と小学校教育をつなぐー幼小連携の現状と課題ー。お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター。
- 5) 山崎晃・杉村伸一郎・若林紀乃・越中康治・財満由美子・松本信吾・林よし恵・菅田直江。幼小教育課程の編成のありかたー幼小一貫カリキュラム編成に関わる学びと学習ー。広島大学学部・附属学校共同研究紀要35: 9-18。
- 6) 秋田喜代美・東京都中央区立有馬幼稚園小学校 (2002) 幼小連携のカリキュラムづくりと実践事例ー子どもが会える教師がつなげる幼小連携3年の成果。小学館。
- 7) 滋賀大学教育学部附属幼稚園 (2004) 学びをつなぐー幼小連携からみえてきた幼稚園の学び。180pp。明治図書。
- 8) 佐々木宏子・鳴門教育大学附属幼稚園 (2004) なめらかな幼小の連携教育ーその実践とモデルカリキュラム。191pp。チャイルド社。
- 9) お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校 (2008) 子どもの学びをつなぐー幼稚園・小学校の教師で作った接続期カリキュラム。東洋館出版、および、お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校・子ども発達教育研究センター「接続期」をつくるー幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協同。124pp。東洋館出版。
- 10) 井上弥・朝倉淳・掛志穂・君岡智央・石井信孝・大橋美代子・加藤桂子・吉原健太郎 (2007) 子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの開発 (4)。広島大学学部・附属学校共同研究紀要35: 19-28。
- 11) 無藤隆・安見克夫・和田信行・倉掛秀人・本郷一夫 (2010) 今すぐできる幼・保・小連携ハンドブック「小1ギャップ」の克服を地域で支えるー。127pp。日本標準。
- 12) 経済協力開発機構 (以下、OECDと略記) (2000) 世界の教育改革。210pp。経済協力開発機構。
- 13) OECD (2003) 生徒の学習到達度調査。(PISA) http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04120101.htm
- 14) 工藤文三 (2008) 平成20年版中央教育審議会答申。全文と読み解き解説。中央教育審議会。176pp。明治図書。
- 15) 文部科学省。幼稚園教育要領 (2008) 132pp。教育出版。
- 16) 小学校学習指導要領生活編「生活科の指導計画作成と内容の取扱い」(2008) 日本文教出版。41-47。
- 17) 善野 (1993) 子どもと保護者と教師が育つ生活科の実践的研究。堺市教育論文集。32pp。
- 18) 善野 (2008) 保幼小連携の課題解決に向けた考察。奈良文化女子短期大学紀要39: 57-68。
- 19) 合田哲雄 (2009) 文部科学省の政策形成過程に関する一考察。日本教育行政学会年報No.35: 2-21。
- 20) 前田洋一 (2009) だから、できた! 保幼小連携でつなぐ子どもの育ち。127pp。ミックスジャパン。

参考文献

- 大阪保育研究所編（2006）「幼保一元化」と認定こども園．かがわ出版．
- 蒲原基道・小田豊・神長美津子・篠原孝子編著（2006）幼稚園・保育所・認定こども園から広げる子育て支援ネットワーク．東洋館出版社．
- 鈴木祥蔵著（2000）「保育一元化」への提言 人権保育確立のために．明石書店．
発達（特集：認定こども園の可能性）（2006）第108号．ミネルヴァ書房．
- 厚生労働問題研究会（2006）厚生労働特集：認定こども園について平成18年8月号．中央法規出版．
- 認定こども園法研究会（2006）認定こども園法の解説—就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律．中央法規出版．
- 原子純（2009）わが国の幼保の一元化における戦後過程と今後の課題について．聖徳大学大学院児童学研究科博士後期課程論文．
- 中山徹・杉山隆一・保育行財政研究会編著（2004）幼保一元化—現状と課題．自治体研究所．
- 森田 明美著（2000）幼稚園が変わる 保育所が変わる—自治体発：地域で育てる保育一元化．明石書店．

付表 1

1-1 接続カリキュラム作成の成果及び参加してよかった点（記述者：小学校教員）

- 自分たちの校区での保幼小の職員たちと交流も大分できてきたと思っていたが、この研究会を通して、まだまだお互いの教育内容について理解できていないことがあると分かった。
- 小学校入学前の幼稚園の活動内容を知ることによって、入学後の活動内容を見直すことができた。
- 幼稚園は幼稚園、小学校は小学校と分けて考えがちであったが、幼稚園から小学校1年生と一人ひとりの子どもの発達と言う視点から長いスパンで見えていくことができるようになった。
- 幼児期の教育や、卒園・入学を意識した活動内容とその計画に対する教員の思いを知ることができた。小学校の教員が、その思いを知った上でスタートカリキュラムを考えられると、内容の充実が図れると感じた。
- 事前にその日の研究会の課題がはっきりしていたので、資料を準備したり、質問や意見を考えたりすることができて良かった。



- 前回の討議資料があり、結果からの課題や問題点の整理から入り、その回の話し合いへと進む研究会の進め方が分りやすかった。
- 日頃感じていることや取り組んできたことをきちんと大学の先生が理論づけていただけるので、自分たちの取組を整理し、課題や問題点が見出しやすかった。
- 実際のところ、教員は小学校での1時間の学習内容の組み立て方を工夫し、子どもたちが学校生活のリズムに慣れ人間関係を広

げていけるような、構想をどう描くのが大切ではないのだろうか。

□保幼小連携の成果を検証することが重要。小学校の立場では他学年の教師に具体的に見えていないという不安がある。

□具体的な接続期の生活科や各教科で取り組む学習内容の検討をしたい。

□各校園の日常の活動が分かる視覚的な資料が欲しい。

1-2 接続カリキュラム作成の成果及び参加してよかった点（記述者：幼稚園教員）

- 小学校の入学式後の子どもたちの姿や授業内容等を聞くことが出来、小学校のことがこんなにも知らなかったとよく分かった。また、話し合いを重ねる中で入学後の子どもの姿がよく分かった。
- 入学後、どのような過程を経て教科学習に向かっていくのかを学ぶことができた。このことを知った上で、幼稚園で小学校就学に向けて育てておきたい力がより鮮明になった。
- 資料を持ち寄り、話し合いやポストイットでそれぞれ意見交流しながら進めたことで発達の過程をわかり合い、育ち学びをつなぐカリキュラム作成につながったと思う。
- 幼児を段差なく小学校へ送るために、様々な角度から幼稚園と小学校が話し合いを重ね、より効果的な無理のない経験をさせていくことが大切であると思った。自園として年長の就学前の保育のあり方をもう一度考えなければならぬと思った。
- 2月の後半から3月の修了式前までの期間を見直したことで、子どもたちに何をどのように経験させることで小学校への不安を除き、期待、憧れをもたせられるのか、今までも一日一日を大切に過ごしてきたが、“無理なくスムーズにそして価値のある”保育のあり方を新たに学んだ。
- 毎回、大学の先生の講話をお聞きすることができたことは、確かな実りだった。
振り返りの中で、前回の学びがどのようなことだったのか、これからの進むべき道がどのような方向なのかを学ぶことができた。
- 幼児の生活の連続性と発達や学びの連携性を踏まえてよりより成長を促す教育活動の充実に向けて振り返る機会となった。
- 「接続期」を明確に設定していくことで、幼小それぞれが意識的に教育内容や指導方法を考えるなど発達の見通しを考えていくうえで意義がある。
- 幼稚園の指導計画の見直しのポイントがよくわかった。
- 幼小互いの教師が子どもたちをどのように見て、どのようにかかわっていくのか、出会いをどうコーディネートをしていくのか接続を意識した連携や指導を考える点で意義があった。
- 話し合いを重ねる中で年長の後の生活発表会後の活動の中に工夫できた。
(机の上で製作活動をする。保育室に自分の名前を漢字、ひらがなで掲示するなど。)
- いろいろな郡市の幼稚園、小学校の先生方の参加で意見交流できたことで就学前の子どもたちの生活や配慮を再確認できたこと、また接続期には大きく環境(人、もの、場)が変化することに子どもたちは大きなエネルギーがいることやそれを確実に丁寧に身に付くように時間をとってしていくことが学習へのより良いスタートとなっていくことが分かった。
- 静と動を考慮し授業の配置を工夫したカリキュラムが作成できた。

付表 3 就学前3週間接続カリキュラム (2009)

日	2/26 (月)	2/27 (火)	2/28 (水)	3/1 (木)	3/2 (金)	3/5 (月)	3/6 (火)
行事		一日体験入学			ひな祭り 体位測定		誕生会
時間							
8:30	いろいろな遊びをする 積み木の構成遊びをする					8:30	
9:00	ドッジボールやサッカー、大縄などを する		学校ごっこをする やってみて思った ことを	学校ごっこをする	学校ごっこをする	9:00	学校ごっこをする 3月生まれの誕生 会
9:30	お話の登場人物などになって遊ぶ わらべうた遊びをする 集団あそびをする うずまきジャンケンなど 楽器遊びをする うたを歌う	一日体験入学に行く		一年間の思い出など について話し合う	幼稚園生活でがんば ってきたことや見て もらいたいことの発 表をする②(歌・楽 器・こま・縄跳びな ど)	9:30	戸外で遊ぶ
10:00	片付ける ・遊んだことについて話し合う	・校内の様子の見学。 1年生に教えてもら いながら体験学習に 参加する。		幼稚園生活でがんば ってきたことや見て もらいたいことの発 表をする①(歌・楽 器・こま・縄跳びな ど)	おひな様をみる おひなさまについて 話し合う ひなあられを食べる	10:00	修了式の話し合い をする ・修了式ってどん なこと ・修了の言葉を決 める
11:00			修了式に歌う歌を うたう 「春の風」 「春がくる」 「ありがとう心 を込めて」		歌をうたう「ひなま つり」 ひなまつりに関する 絵本を見る	11:00	園内で春探しをし る 話し合いをする ・見つけたこと、考 えたことなど
12:00		一日入学に行って、 発見したことや思っ たことについて話し 合う				11:30	
	弁当	弁当		弁当	弁当	12:00	弁当
				思い出の製作をする 幼稚園での楽しかっ たことや友だちと遊 んだことなどを描く	思い出の製作をする	12:30	
13:00	明日の一日入学について話を聞く					13:00	CDを聞く 四季・別れの曲・ アニーローリーな ど
		歌を歌う「1年生に なったら」			歌を歌う「1年生に なったら」	13:30	
14:00	降園					14:00	降園
留意点	(遊びにおける) ・大勢の友だちと遊ぶ楽しさが味わ えるようにライン引きやカラー帽子 を用意しておく。教師も仲間の一員 として参加する。できるだけ子ども 同士でルールを決めたり確認しあっ たりできるように援助する。 ・グループで共通の目的をもち、協 力しながら積極的に遊びを進める姿 を大切に、教師は一步ひいて見守 りながら、その中での仲間関係や、 一人一人の思いを読み取り必要に応 じて言葉かけをする。 ・時間を意識して動いたり、見通し をもって活動できるような環境づく りや言葉かけをする。(あいうえお 表、カレンダーや時計など)	(一日入学における) ・小学校の様子を実 際に見て、小学校に 親しみがもてるよう にする。また、一年 生になったらやっ てみたいこと等につ いて話し合い、入学 への喜びと期待感 がもてるようにす る。				(修了式における) ・修了式の意味や 流れが分かり、自 信や意欲をもって 取り組めるよう にする。 ・保育室の壁面の 環境を自分たち で構成したり、制 作したりしてい けるように声を かける。 (誕生会における) 3月の誕生会を機 会に、みんなが6 歳になり就学を 迎えられるよう になったことを 共に喜び合う。 (春をみつける) 日差しの暖かさ や草花の生長な ど春の訪れに 気づくように する。	

3/7 (水)	3/8 (木)	3/9 (金)		3/12 (月)	3/13 (火)	3/14 (水)	3/15 (木)	3/16 (金)
		保育参観及び学級懇談会 お別れ会			修了式練習 弁当終了	修了式練習 作品整理	修了式練習 大掃除 諸道具持ち帰り	修了式
			8:30					
春探しをする	春探しをする	お別れ会	9:00	春探しをする	修了式の練習をする	修了式の練習をする	修了式の練習をする	担任の先生とお別れする
戸外で遊ぶ	戸外で遊ぶ	歌を歌う	9:30	園庭で遊ぶ	修了証書をもらう 修了のことば・歌	修了証書をもらう 修了の荘とば・歌	修了証書をもらう 修了のことば・歌	
園外で春探しをする。 (お別れ遠足) 園外で見つけた春について話をする	自分の見つけた春の自然物を作る クロッカス・ふきのとう つくしなど	年少・年中児からプレゼントをもらう ダンスをする・先生たち(スタンツ)の披露 お別れの言葉进行	10:00	学級全体でゲームをする	園歌・思い出のアルバム さよなら僕たちの幼稚園など	園庭で遊ぶ	大掃除をする 靴箱・ロッカー	修了式 歌を歌う
ダンスをする		当番活動についての引き継ぎをする。 年長児から年中児へ	11:00				戸外で遊ぶ	お別れの言葉聞く
「ラウンドチェーン」や「もうすぐ一年生」など	修了式の壁面製作をする	学級懇談会は学校評価結果報告会		学級全体でゲームをする		絵や製作を整理する 道具箱の整理する	遊んだ遊具などに感謝の気持ちをこめて、諸道具の整理をする	修了の言葉进行
		学級懇談会の間、年少・年中児と一緒に遊ぶ	11:30				いろいろな先生にお別れの挨拶をする	
弁当	弁当	弁当	12:00	弁当	弁当：全園児と一緒に食べる			
			12:30					
			13:00	弁当を作ってくれた家族にメッセージを書く	弁当を作ってくれた家族へのメッセージを書き加えたり、確かめたりして持ち帰る			
			13:30					
			14:00					
・自分の表現したいこと伝えたい手段として、文字や記号などを取り入れるよう材料を準備する。 ・自信を持って自分の思いを表現し互いに伝え合う喜びを実感できるようにする。		〈お別れ会における〉 お別れ会では互いに顔を見られるように座り方を工夫したり、プレゼント交換などをして、楽しく和やかな雰囲気の中で心に残るような会となるように心がける。			〈修了式における〉 ・修了式の意味や流れが分かり、自信や意欲をもって取り組めるようにする。 ・式の練習をすることで、お互いに(年中・少)別れを惜しむとともに式の要領や雰囲気分かり、年長児としての誇りと自信を持って修了に望めるようにする。 〈その他の活動における〉 ・静と動のバランスを考えた活動を入れる。 ・子ども達のやりたいこと、教師の経験させたいことがうまく生活に取り入れられるように時間配分、活動内容などを考え、最後の園生活が充実したものとなるように配慮する。	・修了式の意味を理解しながら、お世話になった先生や友だちに感謝の気持ちが伝えられるように気持ちを高めたり、雰囲気づくりをしたりする。	・自分たちの部屋や遊具を新しい子どもたちが使うことを意識してきれいにしてもらうように声かけを工夫する。 ・幼稚園での今までの出来事や楽しかったこと等を話し合いながら、お世話になった人に感謝の気持ちをもてるようにはたらきかける。	

